

ほそながい形状は、中だけでなく、外という舞台に拡張されて、生活が展開していく



内外が繋がりながら生活する豊かさ



外との距離感が近い



細長いからこそ楽しみがある



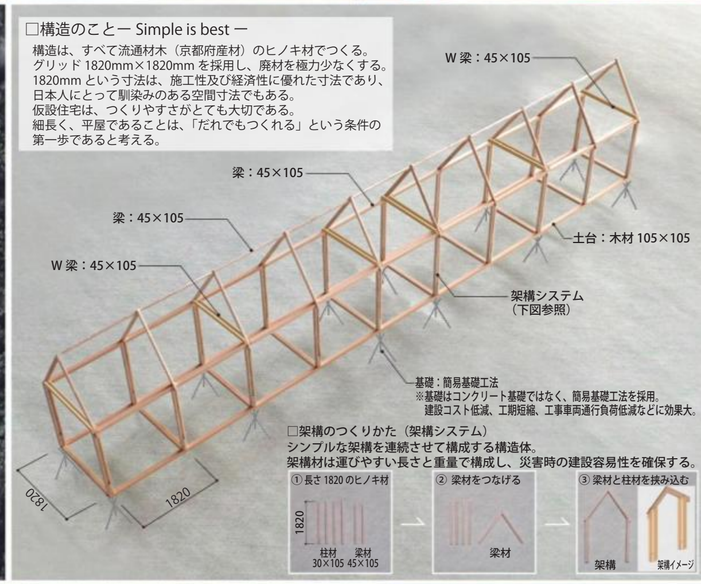
切妻屋根の愛らしい形態



細長いワンルーム



付近見取図



ほそながい線のようないえ

■Background

私の親戚は、令和６年能登半島地震の被災者となった。
と同時に、私の故郷は崩れ去り、かつての風景はなくなってしまった。
私の故郷は、珠洲市宝立町にあり、山と川の大自然に囲まれた小さな集落にあった。
地震の被害を受け、町は土砂崩れにより完全に孤立してしまった。
小さな砂利道が完成するのに約８ヵ月。軽自動車がやっと通れる幅である。
未だに、その小さな砂利道が生活道路となっている。
そんな経験をもとに、この仮設住宅を考え始めた。
都会であれば、復興は早いが、田舎であれば当然のことながら復興は遅い。
この計画は、そんな孤立した田舎の地域でも建設が可能な仮設住宅の提案である。
仮設住宅を設計するということ。
それは、「極度に限られた資源の中で、どのような生活の豊かさを実現するか」
という問いに答えることだと考える。
災害が起これば、当然、普段当たり前のように享受されている資源や技術は
ほとんど使えなくなるのである。
その時に、だれでもつくることができる技術で、手に入れることが比較的容易な
材料で、仮設と言えども、長く豊かに住むことができる住宅を考えてみたい。

■Precondition- 前提条件 -

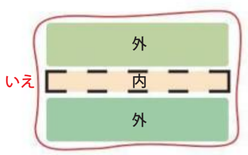
- 建設場所は、孤立された被災地を想定する（搬出入道路は幅員狭く、道路状況も悪い）
- 軽トラックで運べる資材で、建設ができる
- 大工が一人で建設可能（人手は住民が手伝う等素人でも手伝えるような工法）
- コンクリートを使わない（人手とポンプ車が必要なため）
- 資材の長さは 1820mm まで（軽トラックの荷台に乗る長さ）
- 足場は極力不要な工事とする（工期短縮、人手不足を解消するため）

■Concept

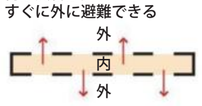
この住宅は、線のように細長い住宅である。
細長さは、必然的に外に意識を向ける。小さい住宅だからこそ、外との結びつきは重要である。
小さく暮らすことで大きな暮らしを得ることができる住宅である。
つまり、「最小は最大なり」ということであるとも言える。
住まいを絞るということは、必然的に生活は住まいの中だけでは完結しなくなり、周囲に生活たちがあふれ出すことになる。つまり、住まいが開かれることになる。
住まいが開かれることで、住民同士のコミュニティが形成され、地域で支えあう仕組みが生まれる可能性がある。これは、災害時にとって重要なことである。細長い住宅は、建設のしやすさはもちろん細長いがゆえの生活の豊かさや工夫が散りばめられているのである。

■Diagram

1. 細長く線のような形だから
外も内もいえのような感覚
小さくても大きく感じられる
いえである
自然を感じながら暮らす
ことができるいえである



2. 細長い形だから
何か災害が起これば
すぐに外に避難できる



3. 細長いワンルームだから
適度な距離感で様々な居場所
が生まれる空間である



